



成川式土器の北のひろがり

甲斐康大

はじめに

異なる場所に住んでいた人々が、「同じ土器を使っていた」、「似ている土器をもっていた」といった場合、そこには何かしらの意味があるといえる。よって考古学では、特定の土器のひろがり確かめることで、その土器を使っていた人々のつながりや、地域間の交流について考える試みがなされている。

成川式土器に関する従来の研究では、主に薩摩・大隅半島が対象地域とされてきた。しかしながら、類似した特徴をもつ土器がその周辺地域にもひろがっている。ここで、あらためて薩摩・大隅半島にひろがる成川式土器の特徴をまとめると、以下のとおりである。

- ① 甕は、底部に脚台があり、口縁部が大きく開く。また、口縁部付近に刻目突帯がめぐる。
- ② 壺は、胴部に突帯をもつ大型壺が作り続けられる。とくに6世紀以降は幅広突帯となり、装飾性が増す。
- ③ 食膳具は、置き食器である高杯が多く、手持ち食器である杯が相対的に少ない。また、5世紀の中ごろから、高杯や杯、小型壺が赤い顔料によって彩色される。

こうした特徴をもつ薩摩・大隅の成川式土器に対し、周辺地域ではどのような土器が使用されていたのか。本稿では、薩摩・大隅半島に隣接するえびの盆地、都城盆地周辺地域の土器がどのような特徴をもち、成川式土器の特徴とどのような類似点や相違点があるのかを整理し、成川式土器の北のひろがりについて考えたい。

1 えびの盆地周辺の土器

盆地の中央部に位置する草刈田遺跡^{くさかりだ}では3世紀半ば、古墳時代初頭頃の土器が数多く出土している。甕が出土土器の大半を占め、少量の小型壺などが含まれるが、いずれも同時期の成川式土器そのものである。ただし、1つだけ異なるのは、甕が脚台をもたず、平底あるいは上げ底とする点である。5世紀代の集落遺跡である内小野遺跡でも甕は平底や上げ底で、3世紀以降変化はみられない。

天神免遺跡^{てんじんめん}は弥生時代後期から連綿と営まれた集落・墳墓遺跡で、とくに6世紀代の土器資料が豊富である。甕は、口縁部から胴部の形状や刻目突帯をもつ点で薩摩・大隅の成川式土

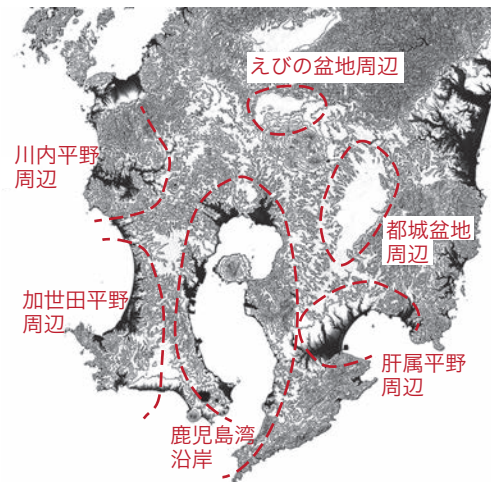


図1 地域区分

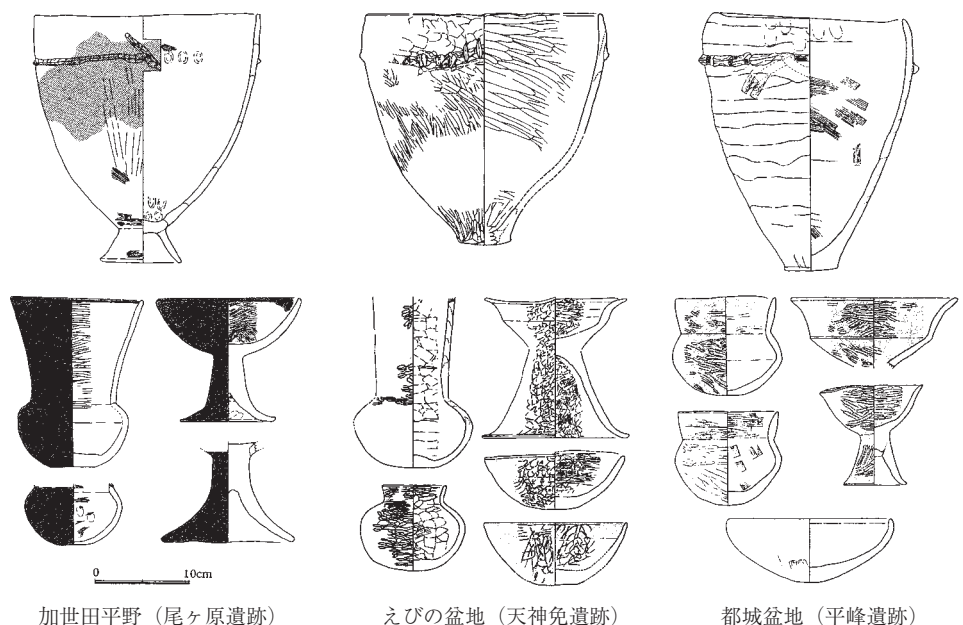


図2 6世紀の各地域の甕と食膳具



図3 沈線・刻目のみによる施文（天神免遺跡）



図4 多条突帯風の施文（天神免遺跡）

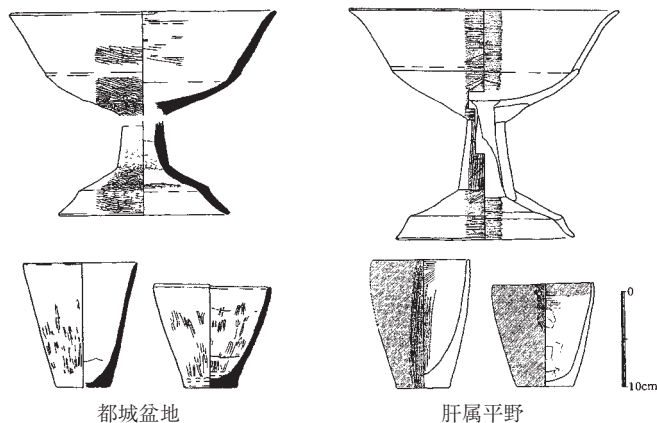


図5 脚部に段を有する高杯と深鉢

器と共通する（図2：中列）。一方で、底部形態はやはり平底である。

食膳具をみると、赤彩された土器が主体を占め、一部の壺などは薩摩・大隅と形態がよく似ている。脚部が太く発達した高杯はえびの地域独自の型式である。また、杯が食膳具の中で一定の割合を占めている点も薩摩・大隅とは異なるといえよう。

えびの地域の土器には、甕・壺の刻目突帯を表現するために特徴的な手法が認められる。1つは沈線や刻みのみで刻目突帯風に表現する手法（図3）である。もう1つは数条の刻目突帯を表現する際に、幅の広い突帯を張り付け、それを横方向の沈線で区画してから刻みを施す手法（図4）である。この技法は、川内平野周辺や加世田平野周辺地域で認められることから、地域間の交流を示す事象として注目できる。

2 都城盆地周辺の土器

都城盆地では、5世紀以前の良い土器資料が少ないが、えびの盆地と同様に甕には脚台がなく、平底や上げ底であることが破片資料から読み取れる。

5～6世紀の集落遺跡である平峰遺跡は、都城盆地の南端に位置する。ここで出土した甕をみると、形態的な特徴はえびの盆地と酷似している。しかし、外面の仕上げとなる器面調整を行わないため、粘土紐を積み上げた際の接合痕跡が外面に幾重にも残っている（図2：右列上）。宮崎平野部にも外面の粘土紐接合痕を残す甕が存在するが、盛行するのは7世紀であるため単純に関連付けることはできない。食膳具には赤彩される土器もあるものの、赤彩されない土器の方が多い。杯は薩摩・大隅地域に比べて普及しており、えびの盆地周辺地域と同じ様相である。

都城盆地周辺地域における赤彩された土器の中にも、地域間のつながりを示すものが存在する。図5にある脚部が段をもつ高杯と深めの鉢は、肝属平野周辺と都城盆地に集中することから、両地域の間には陸路による頻繁な交流があったものと考えられる。また、高杯については宮崎平野でも出土していることから、日向灘や大淀川を介した交流が想定できる。

おわりに

えびの盆地周辺や都城盆地周辺にひろがる土器は、細部において違いはあるが、甕の外見的特徴や食膳具の赤彩化など、3世紀～6世紀までおおむね薩摩・大隅地域の成川式土器と歩調を合わせながら変化を遂げている。

よって、両地域の土器は広い意味での成川式土器に含めることができ、両盆地が成川式土器様式圏の周縁地域であるとあらためて捉えなおすことができた。周縁地域ゆえの他地域とのつながりやすさ、あるいは盆地特有の陸路の要衝としての活発な地域間交流があったであろうにもかかわらず、成川式土器のような独自性の強い土器を作り続けたことには一体どのような理由があったのであろうか、今後の課題としたい。

図版引用・写真出典

図2：宮崎県埋蔵文化財センター 2012『平峰遺跡（1・2次調査）』・えびの市教育委員会 2010『北岡松地区遺跡群』・鹿児島県立埋蔵文化財センター 2006『尾ヶ原遺跡』より引用

図3：橋本撮影 図4：えびの市教育委員会 2010『北岡松地区遺跡群』より転載

図5：宮崎県埋蔵文化財センター 2012『平峰遺跡（3次調査）』・串良町教育委員会 1986『岡崎4号墳・1号地下式横穴』・鹿児島県立埋蔵文化財センター 1996『東田遺跡』より引用

てんじんめん
天神免遺跡

えびの市



古墳時代前期



古墳時代中期

鹿児島・宮崎・熊本三県境の盆地、宮崎県えびの市にある大規模集落遺跡である。古墳時代の全時期をとおして、住居跡が確認できるが、とくに後期後葉段階の資料が多い。

基本的には成川式土器として理解できるものが主体であるが、その中でもえびのの小地域性、宮崎平野からの影響などがみられる。



古墳時代後期

えびの市教育委員会蔵

天神免遺跡

えびの市



えびの市教育委員会蔵

甗

ふいご
轆の羽口